

# アルマアタ日食30周年の集い

秦 茂

1968年9月22日のソビエト日食から早いもので今年30年を迎えた。長野県在住の関さん鈴木さん、お二人の計画で旧交を暖める会を持つことになった。会場は長野県高遠の山中の「国立少年自然の家」である。自然の家の使用については使用目的についての制限、年齢制限など何もない、宿泊料も無料である等の好条件に恵まれている。しかし中央線茅野駅からの交通はバスもないし車で杖突峠をくねくねと走らなければならない、例えば箱根の山中の運転と同じである。バスがないと言ったのは修正しなければならない、何しろ桜の高遠として有名な城跡公園までは春ともなれば国道はバスで動きもとれない状況となり町の人々の通行もままならないとの事である。

ところで通知を頂いた9月22日は台風がこの付近を通ると予測されていて中央線が不通になる恐れもあった。それでも8名のアルマアタの会員がこの悪天候を押して高遠に集まった。東京から数時間のこの地は晴れてさえいればアルプスの山々が身近に感じられる素晴らしい場所なのであるが、その日は倒木の危険さえあった。

この少年自然の家は快適な宿泊施設と周辺の森林の他に、別棟にプラネタリウムと30釐口径の望遠鏡を設備したドームがある。快晴の日のアルプス山脈の眺めもさることながら、私は台風一過の高遠の夜空に多少、期待していた。東京とその周辺では2等星がやっと見えるだけなのに、きっと信州の星空は素晴らしいにちがいないと。しかしこの期待は裏切られた。是非、快晴の夜に再訪して冬の天の川が見たいと思った。

その日の夕食は豪華だった。信州の松茸の吸物に始まって刺身、おでん鍋、煮物等など、これらは私達8人の他に特別に参加された関さんの奥さんの手作りによるもので、本当に頭が下がった。

アルマアタ会の会長であるべき観測団長の上条さんはすでに他界され、次の箕輪さんも病気のため欠席されたので、この場では最年長の私が口火を切らなければならないが、こういう時の話は短い方がいい。

「1968年9月22日の日食は日本のアマチュアが初めて海外遠征を試みた記念すべき日食です。この日食に参加された16名中、8名の方々が嵐の中をこの山中に集まることが出来、大変素晴らしい事と思っています。これは30周年記念ですが、プロの世界では1898年1月22日に4名の方々がインドに遠征されています。これはわが国から海外に観測のために遠征した初めての日食であって、1998年の今年は丁度100周年に当たっています。

私が参加する様になって初めての日食は1948年5月9日の礼文島金環食(団長 萩原雄祐教授)で、大沢教授のもとで太陽の縁辺減光の測定に従事したのが、50年昔のことになります。さらに

1958年4月19日には斎藤教授のもとで種子島で太陽の縁辺減光の測定に参加しましたが、これが40周年に当たっています。何か1998年と言う年に不思議な因縁を感じるのです。」

初めのうちはマルチメディアの話、高遠の町議会、ソビエトの思い出などで花が咲いていたが、其のうちに地元の日本酒が座を回り始める頃になると、男性ばかり16名の中の紅一点だった通訳のゾーヤ・ゴジナ嬢の消息にまで話が飛び始める。

この辺で30年前のソビエト情勢を振り返ってみよう。アルマ・アタ日食の1ヶ月前にソビエト軍はチェコスロバキアに侵入し、プラハ市民の抵抗が続いていた。いわばソビエトは戦時下だったのである。今から考えると、この緊迫した時期にわけの分からない16人の日食キチガイを野放しにしておくことなど、大変危険なことだったのかもしれない。私たちは、皆既帯50キロのコック・トーグに集結させられた。当然のことだが、ここでは99.5%の部分食が見られるだけなのだ。車を借りて敵前突破しようなどと、勇ましい意見もあったが、我々の目前には、厳然として軍事基地が立ちふさがっていた。

日食後、私たちはアルマ・アタ天文台、タシケント天文台、続いてクリミヤ天文台、さらに古都レニングラードにあるプルゴボ天文台と視察旅行を続けたのだが、これらの天文台視察では私たちは裏をかえしたように親切に扱われた。

私たちは、ソビエトの天文台で歴史的に有名な天文学者の業績が大切に保存され、そうした伝統が今に続いている資料館などに心を奪われてきたのだが、現在、日本の天文台では古い資料などは、どうなっているのだろう。

元東京天文台の太陽物理部におられた鈴木さんの発言で「私は機会があるたびに昔の天文台の資料が、アマチュアに公開される場を考えてほしいと、天文台長にも申し上げている」と。ぜひ、実現させてほしいと思っているのは30年前にソビエトの天文台に出かけて感銘を受けてきた私たちだけではないと思う。

最後に1968年当時の記念写真（背景はプルゴボ天文台）と、この翌日撮影した会員の写真を（会員の一人、森さんは急用のため前日、深夜、名古屋に帰られた）載せておく。背後は1981年に竣工された関天文台である。モンゴルで、ベネズエラであるいはインドで見かけた、日食情報誌の仲間の誰彼を見つけだしていただきたい。



1968年9月 プルコボ天文台にて



1998年9月 関天文台にて